

ユニティ10周年 シンポジウム 議事録

「これからの大学について考える―大学連携の未来を探る」

□日時：平成20年9月27日 14時45分～16時

□会場：兵庫県立大学（神戸学園都市キャンパス 三木記念講堂）

□パネリスト：

矢田 立郎（神戸市長）

村元 四郎（神戸商工会議所議員・（社）神戸市機械金属工業会会長）

西谷 春治（学園都市連絡会議代表）

阪本 靖郎（兵庫県立大学副学長）

□コーディネーター：

齊木 崇人（神戸芸術工科大学学長）

○齊木崇人 シンポジウムのコーディネーターを務めます、神戸芸術工科大学学長の齊木です。

文部科学省の義本博司課長に、基調講演をいただき、大学が抱えている課題、そして地域社会の課題が、詳細にあらわになりました。私たちは、この基調講演を受けて、「大学連携の未来を探る」ということで、神戸研究学園都市5大学1高専、私たちは6大学というように呼んでいますが、大学の共同利用施設のユニティができて10周年になることを一つのチャンスに、もう一度「大学連携の未来を探る」のテーマでシンポジウムを企画しました。

このシンポジウムのパネリストの方をまずご紹介いたします。私に一番近い、皆様の左手から、まず神戸市長の矢田立郎さんです。

続きまして、神戸商工会議所議員、神戸市機械金属工業会会長の村元四郎さんです。

続きまして、学園都市連絡会議代表、西谷春治さんです。

続きまして、私どものこの組織の理事で、また兵庫県立大学副学長の阪本靖郎さんです。

ここから、この4名の方々と私とでシンポジウムを展開していきます。

今回のねらいは二つあります。一つは、ユニティという組織と私たちの活動を皆様に

ご理解いただくためご紹介する初めての場が今回の一つの目的です。私たちは、もう一つの目的を設定しました。10周年を記念して次の10周年を構想しようと。ちょうどいい節目、いいチャンス、これを会場の皆様方と一緒に論じてみたいと思います。

今日の記念講演で義本課長にお話いただいた内容は、私たち大学人にとってもまた地域社会でも深刻な課題です。このことを再考するにはどうしたらいいか。これはやはり10年の経験、ユニティができる約20年前にこの大学間連携組織が構想され10年前にユニティという施設と組織が完成し、実質的に学生たちがそのサービスを受け、地域社会にさまざまな貢献をしている。そのことをもう一度掘り起こしてさらには反省をして、次のステップを考えようということです。

まず阪本靖郎さんからは、ユニティのこれまでの活動をお話いただきます。そして矢田立郎市長からは、ユニティができる前の神戸市の大学連携の思い、学園都市の生まれた背景とこれからの課題をお話いただきます。村元四郎さんには企業それから海外の視点からこのユニティの活動をどう読むかというお話をいただきます。そして西谷春治さんからは、このユニティが存在する学園都市の地域コミュニティと大学との関係をお話いただきます。

これでわかりになったと思いますが、すべてこの10年もしくは約30年の間に、この学園都市をめぐる関わってきたメンバーの方々で実態的なお話を紹介しようというのが今回のねらいです。

早速、阪本さんから話をお願いします。

○**阪本靖郎** 兵庫県立大学の阪本です。ユニティのこれまでの歩みとこれからの姿について発表いたします。

ユニティでの大学連携活動が始まるまでの経緯を簡単にご説明しますと、そもそもの発端は、昭和60年11月に発足した「5大学協議会」です。そこでいろいろ議論して、平成2年4月に現在の「大学連携協議会」をスタートさせました。そしてその年の11月には連携事業の基本計画をまとめ上げ、いよいよこれから実施していこうという段階にこぎつけたわけです。活動の場所は、神戸市のご支援で施設が駅前に建設されることになっていましたが、あの阪神・淡路大震災により建設計画は一時中断され、ようやく日の目を見たのは平成11年3月でした。

これからそれ以降の展開についてご説明しますが、ユニティとは、地下鉄学園都市にあるビルの1階、2階を占める大学共同利用施設と、そこで活動している私ども推進協

議会の愛称でございます。ここにはセミナー室や共同研究室、和室やロビーなどがあり、充実した施設となっております。

ここで連携活動を行っているのは、神戸芸術工科大学、神戸市外国語大学、兵庫県立大学、流通科学大学、神戸市看護大学、それから神戸市立工業高等専門学校とそれぞれ異なる特色を持つ小規模大学と高専です。集積メリットを生かして、教育の充実、地域との連携を進めているところです。

これらの加盟校はすべて地下鉄学園都市駅から半径1キロメートルの範囲内に立地しております。

ユニティでは、「加盟大学の教育の充実」、「学生・教員・大学の交流」、「高大連携」、「大学と地域との連携・交流」、この四つを主要な事業として展開しています。

加盟大学の教育の充実の冒頭に挙げられるのは、単位互換講座です。これは活動を始めた平成11年度より現在まで続けてきていますが、昨年度の数字をご紹介しますと、全体で58科目が提供され、1,734名の学生が受講しました。専門領域の関係で自分が所属する大学では受講できない講義を聞くことができる機会として、学生諸君から高く評価されています。単位互換講座が開かれるユニティの教室では、異なる大学の学生が一緒に受講しますので、学生諸君の交流の輪を自分の大学のキャンパスを超えて広げる貴重な機会ともなっており、この点についても学生諸君の評価は高いようです。

「加盟大学の教育の充実」のもう一つの事業は、就職支援事業です。これも平成11年度より実施していますが、その中の代表的な要素である資格取得講座は、平成19年度は6講座提供し、130名の学生さんが受講しました。

もう一つは図書館の相互利用です。これはユニティのような施設がなくても実施できる事業ですので、平成10年から始めています。最初は専任教職員を対象に運用していましたが、順次対象者を拡大し、現在では専任教職員と全学生を対象に実施しています。ちなみに、昨年1年間の貸出数は151冊でした。

次に、「学生・教員・大学の交流」では、まず第1に平成12年度から始まった大学の枠を超えた共同研究の推進が挙げられます。研究助成金を出して共同研究を支援し、その成果を市民の皆様にも公表するこの事業では、昨年までに合計36の研究を支援しています。

それから「学生・教員・大学の交流」の2番目の事業は、これも平成12年度から始まった学園都市大学交流戦です。最初は大学間の学生のスポーツ交流という内容でしたが、

後にレクリエーション競技が設けられ、地域の皆さんとの交流の場にもなっています。
今年の交流戦への参加者総数は延べ約2,000名でした。

次に、「高大連携」はユニティで開いている単位互換講座を高校生にも聞いていただくというものです。この事業は平成15年度から始め、ユニティ加盟大学と神戸市内の19の高等学校との間で協定を結んで高校生を受け入れています。受け入れ対象としている科目は、高校生の皆さんの進路選択の際の参考となることを考慮し、それぞれの専門領域の特徴と骨格、その進路に進んだときの将来の自分の姿を描けることを考慮し、それぞれの専門領域の特徴と骨格、その進路に進んだ時の将来の自分の姿を思い描けること等を考慮し、科目を厳選し提供しています。昨年度は25科目を提供し、27名の方に受講していただきました。

「大学と地域との連携・交流」の筆頭に挙げられるのは、公開講座・語学講座・合同講演会の開催です。これらは平成11年度から始めましたが、昨年度の実績をご紹介しますと9つの公開講座が提供され、延べ2,225名の方々にご参加いただきました。語学講座は、39講座が提供され、964名の参加者がありました。

そのほか学生ボランティア活動等による地域貢献、学園夏祭りによる連携・交流、スポーツ交流戦による交流等を行っています。

以上、ユニティの過去と現在のお話をしましたが、これからの姿については、時間の関係で、ユニティはこれから大学連携を強めることを通して、ユニバーサル型大学の方向に進んでいくべきだ、ということだけを指摘し、私からの発表は終わります。

○齊木崇人 今、最後にユニバーサル型大学というキーワードを提示いただきましたが、このキーワードは後半のフリーディスカッションのところで、また確認をしていきます。
続きまして矢田立郎市長、お願いします。

○矢田立郎 まずこの研究学園都市ができた経緯を少し皆さんに知っていただくことが大事ではないかと思います。

神戸の街は、市街地は非常に幅の狭いところで、市域の大体1割5分程度のところに既成市街地が展開していた状況の中で、さまざまな戦後の産業復興がなされていったわけです。そのときに日本の国全体の問題として、工場等制限法が施行されました。私は、これは悪法であるはずと言い続けてきていました。なぜかと言うと、工場だけではなくて大学までが新增設はまかりならないという法律ですから、市街地の部分に拠点となる大学をさらに展開していくことができませんでした。

そういう中で、神戸はよく言われますように日本で最初のコンテナヤードをつくりましたが、「山、海へ行く」と言われたように、この背後地の丘陵の砂を採り、プッシャーバージで運び、海上に人工島を形成したということです。その過程で、最初はニュータウンが随分設置されていくわけですが、当然その構想中に工業団地、流通団地をどこにつくっていくかとか、この研究学園都市と言われる施設や総合運動公園をどこにつくるかといったグランドデザインをいろいろ検討しながら進めていき、その中でこの研究学園都市が生まれることになりました。このあたりの土砂は多分、六甲アイランドの方に運んで行きましたので、その土が六甲アイランドを生んだとお考えいただいたら結構かと思います。

この地が目指したのは、神戸の中で非常に大学の設置が制限されるということで、理工系の単科大学、芸術系の単科大学、医療系の単科大学、これは看護系を含むわけですが、また新しく流通商品にかかわる経営面の大学も求められていました。

そういった中で、既成の大学では、今は県立大学と言っていますが神戸商科大学、神戸市外国語大学がこの地に移り、新しくできた大学として神戸芸術工科大学、流通科学大学、そして地震の後でしたが、神戸市看護大学というようにして5大学ができたわけです。理工系単科大学は存在してないわけですがそれに見合うものとして神戸高専があり、私どもは5大学1高専ととらえています。そういう集積をこの地に図って知の拠点を形成しようというのが当時の発想でした。

そうして誕生したこの研究学園都市、お互いに大学同士が単科大学ですから、連携を深めていただくということで、5大学の協議会ができ、さまざまな点に関して協調してやっていこうという取り組みをしていただきました。これは先ほど阪本副学長からお話のあった点ですが、そういう連携をしながらやっていく中で、単位互換等の問題、あるいは共通の場の設定が必要ということで、このユニティが生まれてくる状況がありました。これらについて、これからの研究学園都市の将来の発展に向け、一つの大きな拠点になっていただきたいと考えています。

○齊木崇人 矢田市長から研究学園都市が生まれた背景をご紹介いただき、その前に阪本さんからは大学連携のその後の実態を紹介していただいて、約29年の神戸研究学園都市の歴史が今つながったと思います。

今度は視点を少し変え、産業界、企業、そして国際連携の視点からのお話を、村元さんからお願いします。

○村元四郎 私から産業界、中小企業の製造業、商工会議所、また神戸市機械金属工業会を通じて、大学との連携についてのお話をいたします。

神戸商工会議所では20年前から産学連携活動に注目し、昭和61年に神戸大学の工学部と、特に会員の製造業の技術の方々を中心に、こうベテクノサロンを発足させ現在に至って活動を続けています。神戸商工会議所の記録ではこの産学連携、こうベテクノサロンは日本で最も早い技術系の産学交流会ということを自負しています。それから市内の大学学長さん等と会議所の役員による懇談会、また最近の技術の成果を発表する技術セミナー、経済セミナー、学生のインターンシップなど、さまざまな事業を実施していますが、この場合大学と所属会員のネットワークが非常に重要になっています。

もう一方の神戸市機械金属工業会ですが、工業界と大学との連携で我々として成果だと思っているのは、経産省の事業で地域中核人材育成事業というものがあり、神戸大学の工学部と医学部とで社会人コースをつくっていただきました。一昨年から事業を開始しています。これは大学院修了のマスターコースになると思いますが、会員から2名が非常勤講師として授業に参加しています。

また神戸高専とは17年にわたり、産官学技術フォーラムというものを続けています。ソーラーカーの技術支援、ロボットの技術支援等々、またセミナー開催に、我々の現場の技術者を授業に参加させて、技術者が持っている技能を生徒の前で発表することにも取り組み、少しずつ連携が実りつつあるのかなと思っています。今後ますます学校との交流を拡大していきたいと思っています。

それにつけ加えて、グローバル化してきているので、それにも対応した教育を社内的にしなければならないし、また学校としても取り組んでいただきたいと思います。現実には、神戸市の科学技術高校では、先駆けてとりあえず先生がこの夏台湾の日系企業、現地の企業等を視察し、台湾における工業高校のインターンシップの実例等々も視察に行かれました。

○齊木崇人 後程、将来への提案について議論をいただきたいと思います。

それでは西谷さん、この学園都市にお住まいで、かつ大学と連携をとった地域コミュニティ活動をされていますので、そのことのご紹介をよろしくお願いします。

○西谷春治 まずは、ユニティ10周年本当におめでとうございます。いつも心安くさせていただいておりますので、特におめでたいという気持ちでございます。

まず学園都市連絡会議って何か、と思われる方があろうかと思いますが、簡単に申

し上げます。学園東町と西町の各種団体の集まりだと考えてください。その中で、私が一番年上で代表ということになっています。

学園都市連絡会議という名前を使わせていただいた時点で、私たちはこすい考え方をしました。せっかく学園という町にいるから、特色のある学園を活用してこのまちならではの暮らし方を考えようじゃないかということから始めました。スポーツ交流、学園祭などのイベントや図書館といった施設を生かして生活をしようということから始めております。

現在では、まちづくり中期計画の中にも西区では、大学のあるまち西区の推進ということで頑張っていますし、学園都市に対しては大学を生かした多様な交流のあるまちと位置づけられています。

ここで大学の皆さんにお願いなり、お礼を一言申し上げたいと思います。それぞれ色の変った特色ある大学に囲まれた私たちは本当にありがたいと思っています。そして、多くの恩恵を受け、それぞれの大学が持つ知的資源を我々に還元していただいています。地域と連携に努めるということでは、私たちの方がちょっと劣っているんじゃないかと考えて、この間もお話したのですが大学側にメリットはありますか、実際に大学側はそれでいいのですかと、いつも心配をしています。大学の皆さんは非常によくやっただいています。これについて最初にお礼を申し上げておきたいと思います。

さて、一つだけ、学生話をさせてください。連絡会議といいますのは、毎月第4日曜日、今月だと明日ですね。町の清掃をし、その後情報交換等の会議をします。その場所へだれが言ったのか、学生さんが積極的に参加をしてくれます。特に、流科大の体育会の人たちが主体になって、20名から25名の皆さんが毎月やってきてくれます。そして清掃を実施します。その清掃の後、会議をやるのですが、大学の皆さんもその中へ入ってきていただきます。そうすると、町の悩み事やいろいろな話も聞いていただけます。学校では習えない変った内容の話も聞いて勉強になりますと言ってくれました。これが何ともう6年間ぐらい続いております。これには毎月来てくれるのですね。この大学の皆さんは各体育会の方々です。学生は去っていくのですが、次の人へ申し送りも確実にしてくれています。こういういい体育会の皆さんのことを一つ紹介させていただいておきます。

それともう一つ。こういう座学や学校では習えない知識や経験というものを習得してもらいたいと思いますし、多くの人たちと私はお付き合いしますが、学園都市には優れ

た人がたくさんおられます。この人たちを大学で利用していただければ、もっと変わった勉強も大学生はできるかというふうにも考えました。

○齊木崇人 あと30分ぐらいはフリートークがとれることになりました。

ここからは、皆様にユニティと地域社会、ユニティと産業界、企業、それからユニティと神戸市との関係、また阪本靖郎さんからはユニティの大学間での連携のさまざまな内容を紹介させていただき、これらがどのようにさらに連携をし、将来に向かっていくか、そのような内容を少しフリートークしてみたいと思います。

十分な時間はとれないかと思いますが、会場からもご意見がございましたら、お受けしたいと思っております。

記念講演で義本課長からお話をいただいたコンソーシアム、連合大学院、連携の協定のこと、さまざまな動きが日本中で渦巻いております。そのような中で、私たちのユニティはすでに単位互換、共同研究、共同プロジェクト、図書館の共同利用も含む施設の共同利用、共同の教育プログラムなど、さまざまな実践がここに積み上げられています。ただ、義本課長のお話で共同学部、共同大学院や教職員の人事交流というお話がありましたがこれらはこれからの課題かと思いますが、それらの課題を含めて、実はもう2002年の時点で阪本さんがユニバーサル型大学を提案されています。先ほどの市長の、神戸市が学園都市を考える背景となった30年前に出された神戸市の構想と、阪本先生が出されたユニバーサル型大学の内容が重なってきました。これはもしかすると、揺るぎない将来の目標そして、阪本先生のお話と矢田市長がお話しされた内容とはどうも重なっているのではないかなと私は予感いたしました。

その内容はここでは直ぐにひもとけません、まず阪本さんのユニバーサル型大学とは何か、そしてそれがこのユニティの将来にどのようにかわるかというお話をいただきながらフリートークに入っていきたいと思います。よろしくお願いします。

○阪本靖郎 ユニバーサル型大学と大学連携とはどういう関係にあるか、という点についての私の考え方を説明します。

我が国でも大学進学率が50%を超えたことは、先ほどの義本課長のお話でも明らかでしたが、大学進学率が50%を超えるようになった社会では、大学は、少数の人だけが大学に通った時代の大学とは、大きく異なる役割を担うと、私は考えています。だれでも大学に行くということから、この大学を普遍的なという言葉を使って、ユニバーサル型大学としばしば呼ばれますが、その姿は、昔のエリート型大学と比較することにより、

はっきりと見えてくるように思います。

昔の大学では、エリート候補者たちがエリートとして活躍するための準備を大学で行った、ということができます。このとらえ方を踏まえて、新しい大学の役割とは何かについて考えますと、私は、ユニバーサル型大学では、各人が自分の生涯設計を実現するための準備を大学で行うのだ、と考えるのが適切であると考えております。

私どもは、過去の長く続いたエリート型大学のイメージにとらわれているために、ユニバーサル型大学なんてどこにも存在しないし、そのかけらも見当たらないとしばしば考えがちですが、先ほど述べた、ユニバーサル型大学では、各人が自分の生涯設計を実現するための準備を大学で行う、という理解を踏まえ、そういう眼鏡をかけて周りを眺めますと、ユニバーサル型大学の部品、パーツに当たるものが過去10年ぐらいの間に急速に出現してきたように思われます。大学教育改革、高大連携、AO入試、インターンシップ、社会人受け入れ、生涯学習、日本版デュアルシステム等々です。

少し説明しますと、各大学が行う教育改革によって、大学の教育プログラムがどのような将来設計に備えるものであるのか、ということがより明確になってきましたし、それらの選択肢もふえてきました。しかし、人々が抱く生涯設計は、極めて多様ですので、大学のこれらの個別プログラムだけですべての準備ニーズに応えることはできません。ある大学の教育プログラムを終えた後で、別の大学が提供する教育プログラムを受講することが必要になる、ということがしばしば起こります。この必要に応えるには、学生が必要に応じて自由に大学間を渡り歩いて、準備を進めていくことを大学全体が支援することが不可欠になります。

単位互換や編入・転入が正式に認められていますし、さらに学部卒業のために習得する必要のある総単位数である124単位のうち60単位、つまりほぼ半分までを別の大学で習得した単位でもって充当して大学を卒業するということまで現在では、制度的には認められています。このように現在では、仕組みとしては、大学間の渡り歩きを支援するものはできていますが、それを十分には活用できていない、というのが現状のように思います。

次に、大学の入口につきましても、AO入試、高大連携というユニバーサル型大学の部品、パーツに当たるものが出現しています。エリート型大学では、入学志望者を試験、特に学力試験によって選抜していました。これに合格するために、ということで、必死になって学力を高めるということが、入った後への準備にもなっていました。しかし、

ユニバーサル型大学では、希望者をすべて受け入れるということが大前提になります。ただ、動機や関心、必要な学力を備えていない人を受け入れることは、その人の生涯設計の準備を大学では行えないという事態を招きかねません。

したがって、それを達成できるものとして、ＡＯ入試は本来機能すべきだと私は考えています。ＡＯ入試の際に、希望者の動機や学力をチェックし、十分でない者に対しては次のＡＯ入試のときまでにその準備をするように励ますこと、これがＡＯ入試の本来の趣旨だと思います。高校在学中からＡＯ入試を受ける機会を複数回高校生に提供し、その折りに必要な準備をするように奨励することを繰り返し、めでたく高校を卒業した時点で、入試を受けることなく大学に入っていける、こういうことを保証する仕組みがＡＯ入試の本来の姿です。大学と高等学校の連携の核心も、このようなユニバーサル大学の入口を一緒になってつくり上げ、そのために協力する、それが高大連携のあるべき本来の姿だと考えます。

それから、これに伴ってユニバーサル型大学の出口も異なった姿になってくると思います。過去にはエリート型大学の先生やＯＢによる紹介で就職する、いわゆる縁故就職というのが一般的でしたが、大学に行く人が増えることに伴い、それでは機会均等の原則に反する、ということになり、就職試験が一般化しました。しかし、こういう仕方で大学を出た後の、それまで育て準備した能力を生かす機会を決めるのは、ユニバーサル型大学が機能する社会ではそぐわないと考えます。大学で生涯設計の準備を終えたすべての人に対して、準備したものを生かす機会を社会的に保障するように、出口の仕掛けも変わらざるを得ないと考えます。

最近盛んになったインターンシップに、このような出口の仕組みの芽に当たるものが含まれていると思われます。インターンシップの意義は、まず第１に、身につけた知識や技能を実際に応用して、その意味を本人が自ら確認することにあります。しかし、それだけにとどまらず、インターンシップを行う者にとっては、そこで体験している仕事が自分の生涯設計を実現することと関係する可能性についての見通しを得る機会となり、そしてインターンシップ生を受け入れている側にとっては、受け入れ側が必要としている資質等を今のインターンシップ生が備えているかどうかを、時間をかけて確認することのできる機会にもなるわけです。両者の意向がマッチすれば、そこで卒業後に学生が働くことは両者にとって極めて望ましい結果になります。

これを制度的に行おうとしているよう思えるのが日本版デュアルシステムと呼ばれる

ものでして、学びながら実際にその学ぶことと関係する職場で働き、そういうことを繰り返して能力を育て、実習の場と本人の希望、意向とがマッチすればそこが卒業後の活躍の場になる、こういうことだと思います。私は大学が連携して、このような形での就職を支援することが将来の大学の出口の姿だと考えていますが、こういうことを大学側だけでできるその程度にも限界があるので、このような機能が大学から独立して遂行される新しい仕組みにより担われるのが、さらに将来の先にある姿ではないかと考えます。

以上、要するにユニティの今後の進路としては、教育の分野や大学の出口と入口において連携を強めることが必要だというのが私の言いたいことです。エリート型大学の具体的イメージは、個々の大学としてとらえればよいのに対して、ユニバーサル型大学の具体的イメージは、大学相互または高校や地域との間で築く連携の全体として、つまり大学連携システムとして理解する必要があります。そのようなユニバーサル型大学像を関係者が共有しながら、連携を進めていくことがこれから極めて重要になると考えています。

○齊木崇人 ユニバーサル型大学という言葉だけでは、なかなかご理解いただけないかと思いますが、そこにユニティという私たちが実績を積み上げてきた言葉を重ねていきますと、ユニティであればこれまでの連携をさらに深めることができ、そして大学の連合体と高校の連合体との関係を有機的にさらに進めることができます。そしてユニティであれば、産学連携、地域連携が具体的に実践できる、そのようなことを説明、提示いただけたと思います。

この中には決して新しいものを新たにということではなく、これまで積み上げてきたものをどう連携できるか、そのようなことをお話いただけたと思いますが、それをもう少し深めてみたいと思います。まず産学連携のお話で村元さん、これからユニティに期待するものを少しお話いただけますでしょうか。

○村元四郎 難しいですね、私にとっては。改めてユニティの大学は各々個性を持つ大学の集まりで、学生が1万1,000人おられ我々のそばにはあるが特に中小企業ではなかなかうまく連携がとれていないというところもあるのです。兵庫工業会、商工会議所はもう立派な組織ですので皆さんもご存じだと思いますが、我々の神戸市機械金属工業会は神戸市内に立地する中小の、製造業の集まりで今現在302～3社ですが、小さくてもキラッと光る会社や世界に通じる技術を持っている会社もたくさんあります。しかし個々の会社は世間には知られてない。我々ももっと積極的にこういう会社があるという

ことを先生・学生の皆さんに知っていただいて、そういう会社の一翼を担う人になっていただきたいし、また来てもらえるよう経営者として職場環境を整えていかないとはいえないと思っています。もう一つ我々小さい企業は、研究開発には非常にお金をかけにくいので、大学と連携して研究開発部門もうまくやっていけばお互いのメリットが見出せるのではと思います。

○齊木崇人 研究開発、人材養成、これをもっとユニティと連携して展開することで、地域社会にということでしょうか。

○村元四郎 そうですね。人材というところだと、グローバル化、ボーダレス化という時代になってきており、家電製品の大半は中国でつくられ、十数年前は日本が世界の工場だと言われていたのが今は中国が世界の工場で、日本はその地位から追い出されてしまい、皆さんにとっては非常に安い電化製品が手に入る良き時代ですが、日本で商売する我々にとっては非常に苦しい時代です。そういう時代になって私どもも海外に工場はありますが、今日本人が海外工場のリーダーになっています。ぜひこのユニティに加盟する学校の学生にはそういう世界に出て行っても恥ずかしくない、グローバル化、国際化という教育も大事だと思います。

○齊木崇人 まさに大学での出口教育を企業と大学とが連携して行うというお話です。

それでは、西谷さん、大学と地域連携ということで進めてこられましたが、さらにこれからニュータウンのコミュニティの方々と大学とがどういう関係を今から持っていったらいいか、何かご提案がありましたらお願いします。

○西谷春治 現在、流通科学大学と三者協定を結んでいます。これは、学校、区役所と我々連絡会議とが三者協定を結んでいます。ただ、私が心配しているのは、大学側は住民に対してどういう要求がしたいのか、住民が大学に対応できてないのかなという感じも持っています。これからはもっと積極的に、今は大学側が積極的にやってくれているので。それから学生がまた積極的に入り込んでくれています。まちはいろいろな行事や事業をやっています。例えば、年寄りの皆さんの食事会、喫茶店、子育てサークル、細かいことまでまちの皆さんがやってくれているのですが、そこへ学生が入ってきています。この学生と住民との話の中で、私は学生が学校と違った勉強もしてもらいたいというのが大きな考え方です。そういってもまだまだ住民はもっと大学と一緒にという気持ちもう一つ入っていないんじゃないかと心配しています。

私たちは大学を利用して、そして大学と協力したいと思います。特に健康から、子育て

てからもう各種の大学がそれぞれの性格をうまく利用して我々に教授してくれているのですね。これをもっとありがたく思い、住民は各学園祭等に大いに参加して盛り上げるとかいうことも必要じゃないかと思うのです。だんだんとこれから活発になっていくと思いますし、やらなければいけないですよ。特にこういうまちは他になく、これを誇りにしていいまちにしたいと思います。私の後継者、若い人に立派な人がたくさんいますから、もっといい考え方も出してくれると思います。一つ期待してほしいですね。

○齊木崇人 大学からはいろいろ地域のコミュニティとか地域社会への働きかけがあるけれど、逆に住民側がそれに対して反応・対応をしたり、いろいろ活動を起こすというのがまだついてきていないとおっしゃったわけですね。

学園都市の人々も人が入れかわり、大学も学生たちが毎年入れかわりますね。地域社会というのは、そういうことから言うと、常に人の構成が変化する中で、ユニティの活動も展開してきたわけで、特に流通科学大学で今、展開されているようですが、その住民の方々との交流の仕組みはしっかり引き継がれていると思っていいのでしょうか。

○西谷春治 いや、私が一番初めに考えた住民と学生のうまい交わりがないのですよね、この町に。結局学生は通り過ぎていくという感じですね。なぜこんな町をつくったのかなという心配というか。もっと住民と学生がわいわいやりながら、その中でも学生は勉強できると思うのです。そういう場所がユニティかなと思っていたら、意外とユニティはかたいんですね。それからもう一つ不服なのは、これだけ学生がいるのに文房具を売っている店がない。

○齊木崇人 なるほど。各大学の生協や売店ではちゃんと売っていますけどね。

○西谷春治 私は平成7年の地震後にここへお邪魔したのですが、もっといい町と喜んで来ましたがけれども、そういう点では非常に不服なんです。

○齊木崇人 ありがとうございます。西谷さんに本音のところを何とか引き出そうと思って大分努力したのですが、やっと出していただきました。大学、学園都市、計画された学生人口は1万1,000人、これはもう達成されて、1万数千人がもう生活していますでしょうか。その学生たちはここに住んでいる人たちもいますが、周辺の地域にお世話になっており、地域社会は学園都市だけで成立しているわけではないですよ。そういう中での学生たちのさまざまな生活を受け入れる仕組みは、西谷さんがおっしゃったとおり、今からつくり上げていかなければいけないということかもしれません。それから、村元さんがおっしゃったような、卒業生を出口で地域社会が受け入れてこの地域に定着

させる、この神戸に住んでくれる、神戸で働いてくれる人たちを、どう受け皿をつくって受け入れ育てるか、その課題もあると思います。

市長がお話をされた先ほどの内容は、神戸市の先見の明と私申し上げたんですが、学園都市という日本に類例のない環境を神戸市はつくられて、私たちもその後参加して、今ここにユニティという組織もできて大学連携もでき、言ってみれば、産業、企業、それから住民との関係も曲がりなりに体制はできました。これからは質といいますか、内実をどうつくっていくかというステージに入っていると思うのですが、矢田市長さんのご意見をいただきましょう。

○矢田立郎 人間の生活の中で、まず住んで憩い、そして学ぶというのが一カ所で完結できるようなまちということを、今、西谷さん少し言われたのかなと思うのですが、実は、これ非常に難しいんですよ。実際に住む場所とか、遊ぶ場所というのは、個人のいろんな好みがあり、それに合わせて行動しますし、それから意外と学校のキャンパスの中で、学生同士でさまざまな活動をされる。そうすると、その地域の中でともに何かやろうという時間がかかなり制約されるということもあろうかと思いますね。例えば、筑波研究学園都市もそういった悩みをお持ちで、やはりすべての機能をその中で満足できるという都市の形態にしようとしたけれども、そこまで皆さんが望まれないという状態があるというように聞いています。

神戸の場合、周辺にそういう学生マンションとかさまざまなものを企画しました。そういうところには学生の皆さんが随分入っていただくのですが、それを学生マンションばかりをつくって果たしていいのかなというような声もございますから、やはり個人が人生を享受していく際に、自分の暮らしのパターンはさまざまにあると思います。そういう状態で満足できる形態を持ていただく方がいいのではないかと。この地下鉄沿線の区域というのは、随分いろんな顔を持った町が実は点在しています。そういうところにも足を向けて行きたいというのは、学生の思いではないかなと思います。ですから、このまちだけですべてが完結というのもコンパクトタウンということで良い方法だと思うのですが、実際に学生の皆さんが果たしてそういうことですべて満足をしていただけるのかどうかという点があるのではないかと思います。

ちょっと話が違いますが、ユニティというのは、この大学がそれぞれに個性を出していただいて、本当にすばらしいなという、そういう大学の個性が寄り集まってこの共通の単位互換なり、高大連携等が実現できるような連携の場であつたら、私はよりこれか

らこの評価が高まるのではないかなと思っています。そういう中で、社会人リカレントの問題とか、留学生の問題とかも増やしていけるような素地があるわけですから、そういうことも含めて、これからのユニティの内容をより高めていくということが必要ではないかと思っています。

○齊木崇人 阪本さん、今、矢田市長から大学の個性をどんどん磨くことによって、ユニティの魅力もさらに出てくるのではないかというお話がありました。そのことはユニバーサル化とは決して反対の視点ではないですね。やっぱり個性というものは、個々を際立たせ、お互いを磨き合い、お互いに成長するための一つの切り口だと思うのですが、その辺はいかがでしょうか。

○阪本靖郎 多数の人が大学に入るからといって、同じ内容の準備を目指されるわけでは、ありません。それぞれ将来に備えた準備をしたいと思って大学に入って来られるわけですから、それぞれの大学のこの教育プログラムを履修していけば、こういう個性を持った人間として育っていきそれを生かした将来が展開していくことになる。そのような教育プログラムを、それぞれの大学がその資源を使ってつくり上げることが、教育面での個性の発揮だと思います。ここの地域では、それぞれ専門領域の違う大学が揃っていますので、それぞれの大学は、そこで学ぶことからどのような将来の姿が展開していくのか、ということを念頭に置いたプログラムをつくっていただいて、それで学生に来ていただくということが必要ですし、そういう形の教育を進める上では、当然その裏づけとなる研究が、それぞれのところで十分になされていないとうまくいかないことがあります。そういう意味では、研究の面でも違う領域の最先端の研究がなされて、それを共同して進めていく取り組みがこれからますます必要になってくると思います。

○齊木崇人 そうですね。そのようなことから考えますと、ユニティが存在する学園都市だけで完結するのではなくて、地下鉄があります。そして神戸というまちがあります。そしてその田園地域の地域社会もありますが、その地域とどのように有機的に連携してもっと広がった中で、ユニティというのは存在しているということでしょうね。

西谷さんのお話、市長さんのお話を合わせて考えますと、どうも私達はユニティという中に閉じた中でもものを見始めていたのかなと、少し反省を私自らしました。私たちが積み上げてきた成果をさらに外に発信する、今日は関東からもおいでですし、九州からもおいでですが、近畿圏の方々だけではなくさまざま経験されていることもうまく共有できたらいいなと、今この場で改めて思いました。

それから、あともう少し村元さんに出口、要するに大学から卒業し外の地域社会に出て行った人たちがさらに今度は大学に帰ってさまざまな再教育を受けるとか、いろいろ地域社会の中で役に立つ新しい教育を受けるような兆しを先ほど少しお話されましたが、その辺についても恐らくユニティ、学園都市、地域を越えた何か新しいチャンスではないかと思ひまして、ちょっとその辺をお聞きしたいのですが。

○村元四郎 先ほど申し上げた、中核人材育成事業で神戸大学大学院の医工連携コースの話は、神戸市が進められた高度医療都市構想に基づいた事業です。神戸の場合は造船とか、建設機械とか、いわゆる重厚長大型の企業の下請が多くあり、これらの企業が医療機器産業ということにも取り組もうということで8年前ですか、研究会をつくり、その中で我々のメンバーからも参加させていただきました。

我々もいつまでも同じものをつくっている時代ではないので、次々新しい技術が必要になり、次の技術を得るための社会人コースなどできるだけ参加できるチャンスをつくっていただければ助かります。

ただ、社会のニーズというのがあり、技術系はどんどん進んでいくので、何をもってすればいいのかは今すぐ答えが見つかりません。その時代、時代のニーズに合ったものに対応していくことは大切かと思いますが。

○齊木崇人 まさに社会のニーズですね。その点について矢田市長さん、お願いします。

○矢田立郎 今の話にちょっと関連して、今神戸が目指しているデザイン都市、これは齊木学長のところとの関係は大変深いと思いますけれども、街の個性をつくっていくためにはその街にある大学がさっきも申し上げましたが、特性、個性を磨いていただくということは非常に重要だと思います。またそこで学ばれている学生の皆さん方が、そういうことを広めていただくということも大変大きなことではないかと思います。

今、神戸には26の大学、短大がありますが、こういった大学の皆さん方と区のレベルが多いのですが、大学との連携協定を結んでいます。こういう状態がかなり範囲広くやられているのですが、この研究学園都市の場合は、5大学1高専が非常にゾーンを限られたところでの連携的な、西谷さんが先ほどおっしゃったようなことは、どんどんまだ増やしていただける余地があるのではないかと、そうすることより一層連携を通じた接触度合いも深まっていくのではないかと思います。

○齊木崇人 また刺激的なお話をいただきました。6大学だけで閉じるのではなくて、26大学も神戸市にはあるから、そことの連携もより可能性としてあるぞというお話もいた

だけだと思います。

阪本さん、いかがでしょうか。いろいろ皆さんがそれぞれの立場からご意見をいただきました。もう一度大学という視点に戻って何かご意見をいただいきたいと思います。

○**阪本靖郎** 実は、兵庫の地には大学コンソーシアムの組織が複数あって、東は西宮、それから神戸には大学コンソーシアムひょうご神戸、それからこの地には、ユニティがそれぞれ独自に活動しています。最初のは西宮市から、そしてユニティは神戸市から、それぞれ支援を受けて地域のニーズに応えるプログラムを展開していますが、兵庫地域のあらゆるニーズに応えるという状態からはほど遠い、というのが現状です。本日も各地のコンソーシアムからご参加いただいていると聞いていますが、これからは、それぞれのコンソーシアムで連携活動を強めながら、それ以外のところのものとも連携を強めていってニーズを満たすことが必要になる。それは兵庫県下だけでなく、日本全体、ひいては、さらにアジアとかとの関係も、将来は視野に入れた連携を考えていくことが必要になると思います。だから、単独であらゆるニーズに応えるというのは到底できない。

私は兵庫県下の大学への行政側からのご支援が、現在のところは西宮市と神戸市とから別のコンソーシアムに対してなされていますが、将来的には、例えば京都のように京都にある大学全部を京都の自治体が連携して支援する、そういう形を兵庫の地にあるコンソーシアムの連携を通して実現していくことが不可欠であると思っており、そういうことへの配慮も関係の皆様にはお願いしたいと思います。

○**齊木崇人** 皆さんにいろいろ幅広くご意見いただき、ユニティが、組織そして施設ができて10周年ということで、皆様それぞれの立場からご意見いただきましたが、少しまとめさせていただきたいと思います。

この10年間ユニティで経験してきたことは、時代のさまざまな要求や、それから時代の動きに敏感に反応しながら私たちは対応してきたと思います。その間に地震も経験しました。地震を経験する中で、地域社会との関係もいろいろ具体的な問題で対応してきたと思います。

そのような中で、今日の皆様のお話を伺っていて、どうもユニティはもう一つ次のステージに来たなと実感しました。ユニティだけで5大学と1高専で固まるのではなくて、より周囲の連携できる大学、もしかすると神戸を超えた大学との連携もあるかもしれません。阪本さんがおっしゃったように、アジアとか世界の大学との連携もあるでしょう。

そのような大学連携に加えて、西谷さんがおっしゃった地域連携、それから産学連携、これまで国際交流という言葉がいろいろ盛んに使われましたが、今日からもう国際連携という言葉積極的に使っていったらいいかなと。

そのようなことから言いますと、大学連携、地域連携、産学連携、国際連携、この四つのテーマは、同時にユニティではこれから展開していくのかなと今思いました。何よりも幸せなことは、私たちユニティには約30年の歴史があります。10年前に施設ができ、組織ができ展開してきた経験があります。実質的に進めてきたこの経験は、一つの仕組みとして人がかわり、学生がかわり、そして学園都市の住民がかわって引き継がれているという事実があります。このことは市長がデザイン都市というお話もされましたし、大学がまちづくりに参加しろというお話もされましたが、私たち大学がそれぞれの個性をしっかりと発揮し、より明確に主張しながら積み上げていくことで役割が果たせるのではないかと思います。

それから、もう一つ、村元さんのお話で、やはり出口の向こうのことを大学が余り意識してなかったのかなと。卒業して今フリーターの方もいます。その方々は、またユニティに帰ってきて、もう一度勉強して、ある意味力をつけて社会に出て行くことがベストですね。ものづくりに指導者が求められているというお話もありましたが、人材の質を上げていくような仕掛けをどうもユニティがこの役割として求められているのではないかと思います。

そのことから言いますと、市長がおっしゃった個性とは、大学の質をより上げることに求められていると思います。人材の質をいかに上げていくのかということとも重なり、学園都市を含む地域社会の質を私たち大学がどのように参加して上げていくか、そのようにところに大きな課題があるように思います。

地域社会の要求に反応しろというお話があり、やはりこれからのユニティは地域社会の要求に効率よく反応し、活力あるさまざまな仕事も生み出さなければいけないなと思いました。

それから何よりも神戸の歴史と、この学園都市も含めてその場所への誇りをしっかりと共有しなければいけないと思いましたし、阪本さんのおっしゃったように、アジアとか世界の未来にしっかりと貢献し続けられるユニティでありたいと思いました。ですから、もう一度ユニバーサル型大学ということをキーワードに私たちのユニティは実現できるベースが存在しているなと思いました。

このシンポジウムでお話された内容は、記録に残したいと思います。そしてその記録を日本の、またはアジアの地域に発信したいと思います。そういうことで、それを今日参加した方々にはまたお送りして、またインターネット等でもご意見をいただいて、これからの大学が地域や産業社会やコミュニティや、またアジア、世界の中での果たせる役割を確認していくことができればと思います。

まず、今日パネリストとしてご参加いただいた矢田市長さん、村元さん、西谷さん、阪本さんにお礼を申し上げたいと思います。

また、この午後の長い時間、席を立つことなくこのディスカッションに参加していただいた方々、今日の特別講演をしていただいた文部科学省高等教育局の義本博司大学振興課長にも改めてお礼を申し上げます。

この日を私たちの財産にして次の時代、10年先のユニティに歩んでいきたいと思います。これをもってシンポジウムを終了させていただきます。ありがとうございました。